



特集

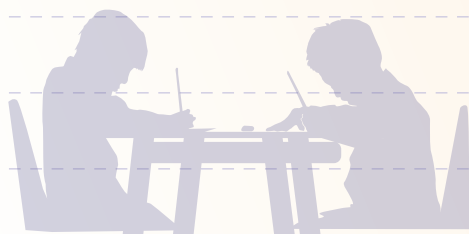
「小5 最難関模試」

中学入試レポート

難関校“合格”のカギは、 入試問題に少しずつ近づく 学力と適性を培うこと！

今回の小6・小5対象「最難関模試」は、年に1回の貴重な機会。チャレンジしてくれた受験生の皆さんには、ぜひここから、志望校の入試を突破するための、何らかの手がかりをつかんでほしいと思う。

小6の受験生にとっては2017年の入試本番まで残り約2か月となったが、まだまだこれからが本格的に“実戦で生きる力”を身につける段階だ。そして小5の皆さんは、今回の成績や判定結果をバネに、目標に向けて努力を重ねていってほしい。そして保護者の皆さんには、これから約1年2ヶ月後に、わが子が第1志望校にチャレンジしていく覚悟を固めるためのサポートを上手にしていっていただくことをお願いしたい。



首都圏模試センター

第1志望校は、迷わない。 強い意思をバネに持続的な努力を！

今回の「最難関模試」を受けてみたお子さんの手応えは、どのようなものだったろうか。今回の判定結果からは、いま親子で決めている志望校に対して、さまざまな手がかりや実感が得られることだろう。ただし何度もいうように、志望校への合格判定の結果が良くても決して油断してはいけないうし、また、結果が予想より悪くても、気に病む必要はない。

こうした模試は、あくまでも合格可能性の一端を探るものであり、自分の学力（成績）について、ある母集団のなかで相対的な位置を探るためのもの。つまり大勢の仲間のなかで「力試し」をすることが本来の目的だ。今回の「最難関模試」は、いつもの「統一合判」と比べても出題の難度は高めで、受験生の母集団も選り抜きの優秀生ばかりであったことを考えれば、なかには厳しい結果もあったことだろう。

しかし、保護者のみなさまにお願いしたいのは、今回どういう結果であったとしても、第1志望校については、必要以上に迷うことなく、今後も努力を続けていってほしいということだ。親子で選んだ志望校ならば、この時期から迷う必要はない。中学入試はたった1度きりのチャンスなのだから、むしろ残り約1年と40日～2か月の間に、入試本番で良い結果を残せるよう、全力で努力していく強い意思を固めるべきなのだ。

そういう意味でも、小5のこの時期から難関校にチャレンジする気持ちをしっかりと持って、がんばってこうとする受験生と保護者の皆さんには、賞賛と励ましの言葉を贈りたいと思う。

これまで1年ないし2年の受験準備の期間に、高い目標に挑む気持ちを維持したままで、それぞれ



男子受験生にとっての首都圏私学の最難関、開成の2月1日の入試風景。

ペースをつくって受験勉強を続けてきた、その意思の力と地道な歩みこそ、これから入試本番に向けての自信にしてよいものなのだ。

難関校に挑む気持ちと目標をバネに、 入試直前まで学力アップをめざす！

以前にも本レポートで、「小学生の学力は入試直前まで伸びる」と強調したことがある。まだ12歳で成長期の真っ只中にある小学生だからこそ、ひとつ自分にとっての「飛躍のきっかけ」をつかむことができれば、学力も精神力も大人がびっくりするほど急成長する。そしてそういう例は決して珍しくはない。

その点でも、こうした難関校の入試へのチャレンジを目標におき、最後の最後まで努力を重ねることが、そうした「学力の急成長」への最も効果的なステップになる。

たとえばこれから1年後の小6の11月段階で、めざす難関校の“合格”への自信までは持ていなくとも、自分自身にとっての課題をある程度つかみ、それを消化、克服できればよいという手ごたえを感じられた受験生ならば、それからの時間に何を集中課題として取り組みればよいのかを、だいたい理解できているはずだ。

そこまで到達しているお子さんならば、あとは



迷うことなくラストスパートに励めばよい。ここまでできたら、親はお子さんのそうした姿を見守り、側面から生活リズムや健康管理のサポートをしてあげるだけで十分だ。

難関校に挑んでいく意義は、決して“合格”だけにあるのではない。自分自身でがんばれば手が届くぎりぎりの高い目標を掲げ、それに向けて毎日の努力を重ね、より幅広い知識や深い理解を得ていくこと、それ自体に大きな意味がある。それがこの先、中学に進学してから必要になる学力と「自ら学ぶ力」を日々育てていくことになり、将来にもつながる力となる。

そういう過程の延長線上に、めざす志望校の“合格”がある。そう考えることができれば、迷わずに難関校に果敢に挑戦していく意義は大変に大きなものがあるのだ。

志望校の過去問題を指標にして、志望校への適性を育てよう！

そして、これから入試本番までの約1年間と2ヶ月の間に組み、合格への突破口を探る最も有効な手段として、ときおり「志望校の過去問題に目を通してみる」ことを紹介しておこう。

中学入試では、各学校のカリキュラムや学習指導方針が反映した独自の個性的な出題と向き合ったときに、そこで「合格点が取れるかどうか」が本当の勝負。こういう各校の「出題の個性」と正面から向き合う学習が必要になる。

まだ小5のこの時期に解けなくてもかまわない。志望校の入試問題に少しずつ慣れ、その内容や意図するところを感じ取り、いざ再来年の2018年入試の本番で新たな出題と向き合ったときに、「あのときやった問題と似た出題だ」と思えたならば、もうしめたものだ。

女子受験生にとっての首都圏私学の最難関、桜蔭の2月1日の入試風景。



そういう実感と、出題をひと通り見渡したときに「この問題から解いていこう」という手順を判断できる“見極めの力”が1年後に身につけば、なおさら自信をもってよい。こうした手応えに近いものを、入試直前までに何度か実感できることができたならば、合格にあと少しで手の届くところきたと考えてよい。

こういった自信を持てるように、志望校の過去問題に繰り返し親しむことが大事なのだ。残り1年と約2か月、それらの問題に寄り添っていくことができれば、きっとお子さまにとっても、保護者の皆さんにとっても、再来年2018年の中学入試での受験体験は、必ずや実り多きものになるはずだ。

親としての最後の大事な役割は、万全の併願作戦を立ててあげること！

ただし入試の直前までに、お子さん自身が第1志望とする難関校に「思い切り挑んでいく」ためには、どういう結果が出た場合でも、くじけずに最後まで受験し続け、親子とも「やるだけのことはやった」と思えるような、万全の併願作戦が必要だということを忘れないでほしい。

現在の中学入試では、相当な難関校であっても複数回の受験チャンスがある。実際にそうした学

第1志望校は迷わずに、強い気持ちで目標に向かおう！

～残り約1年と40日～ 70日間の努力で、一步步“合格”に近づこう！～

これまでも本レポートでは、繰り返し「第1志望校は迷わずに」と述べてきた。誰に遠慮することなく、親子で自由に選んだ学校に「思い切りチャレンジしていける」ことこそが、中学受験の特色であり、魅力でもあるからだ。

そしてここでは、その第1志望校への挑戦のステップとするためにも、そのほかの併願校を幅広く選び、慎重な併願作戦を立てる必要があることを、再度強調したいと思う。

今回の小5「最難関模試」で合格判定の対象になっている難関校にチャレンジしていこうという受験生のご家庭ならば、一方でそのための併願作戦も、すでにしっかりと考え始めているに違いない。

それならば、なおさらこの時期から「第1志望校を迷う必要はない」ということを、あえて小5の受験生と保護者にお伝えしたいのだ。

あとのコラムにも述べるように、最近の中学入試では、難関といわれる学校ほど、各校の理念や主張を、それぞれの入試問題に色濃く反映させ、いっそう個性的な出題をするようになっている。

そうした個性的な入試問題に立ち向かい、合格を得るためには、「偏差値からは見えてこない」ポテンシャルや、「偏差値を乗り越える」だけの気力と学力（＝合格力）が求められる。



首都圏中学入試の最初のヤマ場、1月10日、東A日程の入試には約5000名の受験生が集結する！

そして、そうした「偏差値を超える」合格力を身につけるには、これから再来年の2月1日までの残り約1年と70日の間の努力と、それを支える親子の強い意志（思い）が欠かせないのだ。

何度も繰り返すが、今回の判定がどうあろうとも、まだこの時期から第1志望校について迷う必要はない。大切なのは、これからの学習で高く骨太な学力を育てていくことだ。

成績や判定結果、さらには過去問題演習から見えてきた、それぞれの課題を克服すべく、まだ1年以上もある時間を有効に使って、一步步確実に“合格”に近づいていってほしいと思う。

校が第1志望の受験生ならば、当然ながら、1回目の入試の結果が悪くても、再度挑戦することを視野に入れることになるだろう。

そうした再挑戦の際にも、受験スケジュールのなかに、ほかに1校でも自信をもって挑める「押さえ」の学校（ほぼ確実に合格が取れそうな学校）があれば、その“合格”結果や安心感をステップにして、第1志望校に思い切り再挑戦（リベンジ！）していくことができる。

わずか12歳の小学生が挑む中学入試だけに、本番では何が起きるかわからない。どんな場合にも、

前向きな気持ちで受験を続けていけるような、2段、3段構えの“合格”プランを考えておくことが大切なのだ。

もうひとつ、あえてお伝えしたいのは、こうした勇氣ある「難関校への挑戦」に踏み切った親子だからこそ、悔いは残してほしくないということだ。もし結果として第一志望以外の学校に進学することになったときには、親子ともども当初の第1志望への未練を吹っ切って、合格した学校に「胸を張って」進学して（進学させて）ほしい。

そして、新たな気持ちで、中高6年間の学校生



志望校の過去問題に親しみ、それとの“相性”や“適性”を育てよう！

～私学の教科指導方針の反映である入試問題から、合格へのヒントを探し出そう～

11月に行われた第5回小6対象「統一合判」の本レポートでは、「各志望校の入試問題との“相性”や“適性”をしっかりと探り、その芽を育てる！」ことが大切だとお伝えした。それは小5の受験生にとっても大事なことだ。そして11月下旬を迎え、皆さんの先輩でもある小6受験生は、いよいよ志望校の過去の入試問題に本格的に集中して取り組むべき時期がやってきた。

小5や小6の夏休みを終えて間もない時期までは、過去問題を解こうとしても、まだ半分も解けなくて自信をなくしてしまうようなケースもあって当然だ。

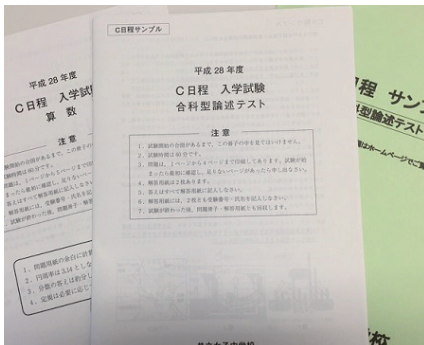
しかし、そうした小6生もこの11月の時期ならきっと、もう1歩も2歩も、先の段階まで解き進めるだけの力が身についてきたことと思う。そうした1年後の学力的な成長を信じて、小5の皆さんも、この先は、各志望校の過去問題に触れ、多くの中学入試問題と

真剣に向き合うことを通して、作問者の意図を感じ取り、そこで求められる力をひとつずつ身につけていってほしいのだ。

私学の入試問題が即ち、その学校の6年間の指導方針や中高一貫のカリキュラムを反映したものだとなれば、その学校の入試問題に徹底的にあたることで、その学校との学力的な“相性”や“適性”を育てることにつながる。

何より入試問題に正面から向き合い、そこで求められている力を探ろうと努力することで、非常に多くのことを吸収することができ、それだけ“合格”に近づくことができる。

小5のこの時期からそうした中学入試問題に数多く触れていくことで、偏差値のうえでは見えてこなかった「合格可能性」が、グンと身近なものになってくるはずだ。



共立女子が今春2016年入試から3回目のC日程で行った「合科型論述テスト」にも注目したい。こうした新たな出題形式にも注目したい。



1月の千葉エリア入試の風物詩となっている市川中の1月20日幕張メッセ入試には毎年大勢の受験生が集結する！

活へ踏み出してほしいのだ。自分の力で合格して進学した学校をお子さん自身が「自分にとっての最良の学校」と受け止め、勉強にもクラブにも打ち込み、楽しく豊かな6年間を送ることができれば、それが本人にとっての、将来に向けた大きな自信を育ててくれる。

まだ12歳の柔らかな感性を持つ子どもたちだからこそ、受験生本人はそういう現実の入試結果

に自然な割り切りができ、進学した学校にもすぐ馴染むことができる。だからこそ中学受験の世界では「受かった学校がその子にとっての一流校」といわれ続けてきたのである。

もし1年と2ヶ月後に、親子ともにそうした“吹っ切れた”気持ちで本番に挑むことができれば、再来年2018年入試の結果もきっと良いものになるはずだ。

“変わってきた”難関校の入試問題から、そこで求められる力をしっかりつかもう！

～「自分の頭で考えさせ、表現させる」最近の問題傾向に馴染み、じっくりと取り組める力を！～

以前に本レポートのコラムでも「“変わってきた”私学の中学入試問題に注目しよう！」とお伝えしたことがある。

最近の中学入試問題が、少しずつだが目に見えて「変わってきた」ことは明らかだ。

この10数年間を振り返ってみても、まず2005年には駒場東邦が4科目の試験時間をそれぞれ延長し、「じっくり考えて解答をつくってほしい」と狙いを明らかにし、海城は（記述問題の比重を高めたことにともない）社会・理科の配点比を高め、より本格的な「4科目型」入試へとシフトした。そうした動きに象徴されるように、いま、中学入試ではこれまで以上に「じっくりと粘り強く考える力」、「自分の言葉で表現できる力」が求められるようになってきているのだ。

同じく2005年に東邦大東邦が理科の試験時間を30分から40分へと延長した理由も「受験生の科学的文章に対する読解力や表現力をこれまで以上に発揮してもらうため」とされていた。

その前年の2004年入試では、桜蔭がそれまでの国・社と算・理のセット型の入試から4科目別枠での入試に変更し、例年以上に「その場で考え、表現させる」ような問題を多く出題し始めた。ほんの10年くらい前までの桜蔭の問題と最近の問題を比べてみると、記述式の比重が非常に高くなっていることがわかる。

2006年入試では、青山学院が「4科目入試化」に踏み切ったことも、4科目にわたってこうした「考え、表現する」力を今後求めていきたいという、学校側の願いが表れた入試改革だ。

一般的に中学入試の世界では、小刻みで目まぐるしい入試改革（＝入試要項変更）は、難関校よりもむしろ、中堅～中堅下位の私学で数多く行われる。しかし、出題のコンセプトや入試構造そのものを変えてしまうようなダイナミックな大改革は、むしろ難関校が口火を切ることのほうが多い。そうした意味では、最近10数年の「入試問題の質的な変化」は、明らかに難関校が中学入試全体をリードしてきたといえるだろう。

その後そうした難関校の動きが中学入試全体の



共学化と校名変更の初年度には、のべ2200名、翌2016年にはのべ3000名以上の志願者を集め、首都圏中学入試の台風の目となっていた三田国際学園の入試風景（写真は2月1日午後）。

ムーブメントとなっていったことは、これまでの私学全体の動きからもわかる。こうした最難関校の入試問題の変化は、他の私学をこれまで以上に刺激し、良い意味での影響を全体に与えていくのだ。

その後、2008年には、横浜雙葉が国・算の試験時間を延長し、従来の4科目均等配点から、国・算の比重を高めた。2009年には、武蔵が社・理の試験時間を延長し、栄光学園、攻玉社は算数の試験時間を延長した。続いて2010年には、雙葉が4教科とも試験時間を延長した。そして2011年には、フェリス女学院が国・算の試験時間を延長し、配点比も高めた。

その後、2012年から今春2015年にかけても、「自分の頭でしっかりと考え、表現させる」タイプの出題の比重は増加し続けている。

これもまさに、4年後に控えた「2020年大学入試改革」と、その先の社会で求められる力を、私立中高一貫校ですでに早くから見通し、それに先駆けて、自らの中高一貫教育のなかでその力を育てようとしてきた。その姿勢が中学入試問題にも反映されたものと理解しておくべきだろう。

そうしたムーブメントにも、あらためて注目して、最難関校の問題傾向をしっかりとつかみ、それに馴染む努力を重ねていってほしい。

それとともに、それら難関校と併願するにふさわしい、他の中堅～新進気鋭の私学の「将来性」にも目を向けていただきたいと思う。



中学入試の「合格最低点」は、最難関校でも意外に低い！

～長所を伸ばし、短所はできる範囲で補強し、解ける問題から順に解いていこう～

今回の「最難関模試」で受験生のみなさんが志望している各私学の「合格最低点」の過去3年間推移は、小6の受験生向けには、先の11月3日に行われた第5回「統一合判」模試の「解答と解説」冊子の巻末資料のなかでもご紹介した。難関校のなかには、いまだ合格最低点を非公表としている学校もあるが、ここでもう一度、中学入試における難関校の合格ラインに注目していただきたい。

あらためて意識してほしいのは、最難関レベルの学校であっても、中学入試における合格最低点は、意外に低いということだ。

ちなみに今回のテストのメインの判定対象校の2016年入試の合格最低ラインを見てみると、男子校では浅野56%、麻布52%、栄光学園58%、海城①59%、開成63%、駒場東邦57%、芝①61%、聖光学院①64%、筑波大駒場66%、桐朋64%、武蔵58%、早稲田①63%と、筑波大駒場を除くといずれも65%以下（慶應普通部、早稲田高等学院は非公表）だ。

女子校では浦和明の星女子①66%、鷗友学園女子①56%、学習院女子A61%、吉祥女子①65%、白百合学園63%、洗足学園①4科68%、豊島岡女子学園①67%、雙葉65%、横浜共立学園A64%、横浜雙葉66%で、桜蔭、女子学院、フェリス女学院などは非公表とされている。

共学校では青山学院4科〈男〉57%、同〈女〉52%、市川①〈男〉66%、同〈女〉68%、渋谷幕張①51%、東邦大東邦〈前・男女〉63%、早稲田実業〈男〉57%、同〈女〉62%など、となっている。

こうして見ると、ほとんどの私学、とくに難関校の最低点は65%前後か、それを下回ると考えてよいだろう。なかには60%どころか、年度によっては50%を下回る学校さえある。

中学入試はもともと、各学校の中高6年間の教育、学習指導のもとで、将来に向けて「伸びていける」資質や可能性、そして意欲を問うものだ。決して、わずか12歳の段階での隙のない、完成された学力を要求するものではなく、ましてや荒削りの受験生を減点法で「振り落とす」ためのものではない。

仮にこうした難関校の毎年の「合格最低点」が、平均して60～65%程度であるとすれば、受験生は出題の6割～7割近くが得点できれば、堂々と合格していけるということになる。

したがって、小6の受験生であってもこの11月末の



入試が連日続いている間にも合格発表が行われる。写真は例年2月2日午前中に発行される女子学院の合格発表風景。

段階では、まだ荒削りで、学力的にはいくつも穴や弱点が残っていても悲観することはない。残り2か月のラストスパートで、学力的な強み（長所）に思い切り磨きをかけ、そこで鍛えた力を武器に、自信を持って難関校に挑んでいってよいのである。

もちろん、弱点補強も一方では大切。しかし、それが気になって時間をかけ過ぎ、せっかくの長所が伸ばせずじまいで終わってしまつては本末転倒だ。

ただし、いざ入試本番を迎え、各校の出題と向き合ったときには、実力を存分に発揮できるような注意力と、解き方のコツを身につけることも必要だ。

それにはまず、入試問題が配られたら、全体にひと通り素早く目を通し、「できそうだ！」と感じた問題から手際良く確実に解いていくことだ。実際にこういう「見極め」ができるようになれば、合格まで「あと1歩」のところまで実力がついたと考えてよい。

だからこそ、これから入試直前にかけては、こうした点を意識して、各学校の過去の入試問題にあたってみるべきなのだ。

本文でも述べたように、志望校の過去の入試問題には、その学校の6年間の学習指導方針や、カリキュラム内容が、実に色濃く反映されている。そういう教育方針のもとで、意欲的に学習していけるような資質と基礎学力をもった受験生を迎え入れることが、各学校の入試選抜の目的だといってもよい。

だからこそ、解ける問題は確実に解き切り、残りの時間で「手強い」問題に、できる限り食いついていくという手順と姿勢で出題に挑むことが望ましい。

くれぐれも、最初に手をつけた難問に時間をとられて、全体に目を通せなかった、といった失敗がないようにしよう。

難関校の入試も動き、変化する。その背景にある意図に注目しよう！

～すでに大きな成果をあげている難関校であっても、私学はさらなる進化をめざす～

いま小5のお子さんが挑む2018年入試に向けた各校の入試要項変更は、これまでも各種の資料でお伝えしてきた。こうした入試改革の動きは、難関校の間でもこの10数年の間に激しくなっている。ここでは、最難関模試のメインの合格判定対象校について、あらためてこの間の入試改革の動きを振り返ってみよう。

まず男子から見ていこう。麻布では、2006年から願書に出身小学校の校印が不要となった。駒場東邦は2005年から4科目の試験時間を10分ずつ延長。武蔵では、各教科ごとの合格者平均点、受験者平均点を2005年からホームページで公表するようになった。そして、それまで社・理計60分、計100点だった試験時間と配点を、2009年から社・理各40分、各60点という形に時間延長し、配点も高めた。つまり、この頃から最難関の出題が「より深く考えさせる」傾向へとシフトし始めたことになる。

海城は、2006年に計40名の募集定員増。高校募集を削減し、さらに中高一貫の体制を強めると同時に、ひとクラス分の帰国生募集を開始した。桐朋は、出願書類に必要だった小学校の在籍証明を2006年から不要とした。そして2011年からは、高校募集の停止とともに中学募集定員を増加。そして今春2016年からは、ついに2月2日に2回目入試を新設し、大きな注目を集めている。

今回の模試のメイン対象校ではないが、立教池袋は、2006年から1回入試での活動報告書の提出を廃止。2回のAO入試では面接の方法を変更。従来の第一面接を廃止して、第二面接（自己アピール面接）のみとし、AO入試の特色を鮮明に打ち出すようになった。これも最近の大学入試の傾向である「AO重視」的な動きと連動したもののだろう。

次に女子を見てみよう。浦和明の星女子は、男子の海城と同様に、2006年には計40名の定員増と同時に高校募集を停止。通知表コピーの提出も不要として、さらに受験しやすくなり、中学開校から早くも4年目で完全中高一貫校へと移行して、現在まで埼玉エリアの女子の最難関校として高い人気を維持し続けている。同様に豊島岡女子学園も2007年に計40名の募集定員増。中高一貫体制を強めた。現在では3回の入試とも女子の最難関レベルにあり、男子の難関進学校と比べても遜色のない大学合格実績をあげている。

女子学院は2006年に合格発表を2月2日の10時から11時へと変更。同様に雙葉も、合格発表時刻を2日の8時から9時に変更している。これも記述問題の増加や途中式・考え方を書かせたものを、丁寧に採点するための措置と考えられる。また雙葉は2007年から体育実技を廃止した。共学校では、青山学院が2006年に2科・4科選択入試から



難関校になるほど合格発表の時刻が近づくと現場は緊迫感に包まれ、合格者の受験番号が掲示された瞬間には喜びの声があがる（写真は桜蔭）。

4科目入試に移行し、この頃の中学入試の“4科目化”への潮流を強く印象づけている（ただしこの2～3年の傾向としては、中堅校以下では再び“2科目化”の動きが目立つようになっている）。

慶應湘南藤沢は、2006年に「活動歴申告書」による実技試験を廃止。慶應中等部は、2006年に1次試験日を2月5日から3日へと変更し、受験生にとっては2月3日入試校との併願を熟考する必要が出てきた。

渋谷幕張は2007年から帰国生入試を一般入試と別日程で実施。市川も2009年から帰国生入試を一般とは別枠で実施している。

筑波大附属は2006年から1次（抽選）を廃止。通学区にさいたま市の全域を加えた。そして2008年には通学区をさらに拡大。同じく2008年から筑波大駒場も通学区をさらに拡大した。

お茶の水女子大附属は2006年から1次（抽選）を廃止。試験科目を従来の全教科から4科目へと変更。さらに通学区を拡大し、大きな改革へと踏み切った。他の国立大学附属中では、東京学芸大附属世田谷が2005年に抽選廃止、受験可能な区域の拡大に踏み切っている。

早稲田実業は、併設小学校からの進学者の受け入れにともない、2008年から中学募集を従来の男子約150名、女子約75名から、男子75名程度、女子39名程度と半減させた（2016年は男子85名、女子40名募集）。

さらに前のページのコラムでも触れたように、多くの難関校が、科目ごとの試験時間を延長したり、あるいは国・算の配点比重を高めるなどの入試問題改革に踏み切ってきた。そして再来年2018年入試に向けても、また新たな動きがあるだろう。

こうした動きには、いずれも各校の入試・教育改革の狙いや、生徒募集に対する新たな考え方や変化が反映されている。そうした動きの背景にある各私学の教育姿勢まで理解して受験校（進学先）を選ぶことができれば、きっと実り多い結果を得ることができるはずだ。